掲載日:2016年08月10日，面名:４社，記事ID:KIJ20160810_M002800100DW07008
(C)新潟日報社

折り鶴に託す願い

71年後のヒロシマ

＜下＞

被爆資料

「本物」の説得力 後世へ

劣化防止、修復に試行錯誤

オバマ米大統領の折り鶴が注目を集める広島市の原爆資料館。順路の最初に並ぶのは、原爆で亡くなった人たちの遺品だ。6日の平和記念式典に合わせて訪れた燕市の燕北中3年安井陸渡さん(15)は、真っ黒に焦げた弁当箱を見て「写真で見るより心に残った。切ない気持ちになった」と話した。

原爆の悲惨さを無言で伝える被爆資料は71年たった今、劣化が進んでいる。

昨年7月、展示していた懐中時計の短針が折れていることに学芸員が気付いた。原爆投下時刻の午前8時15分を指し、図録の表紙も飾った象徴的な資料だった。同館の加藤秀一学芸課長(55)は「放射線や強烈な熱を浴びた資料をどう保存していくか、試行錯誤している」と管理の難しさを語る。

本年度、劣化対策に約1200万円の予算が付いた。9万点にも及ぶ収蔵品のうち、特に劣化が懸念される紙焼き写真やフィルムを優先して調査、整理している。空気中の物質を調べる機械も購入した。展示室などの環境を調べ、科学的な観点からも資料のより良い保存方法を探っている。

被爆資料を残すのは資料館だけではない。戦前から街中にあり、被爆に耐えた建物や樹木も貴重な資料だ。広島市によると、民間のものを含めて被爆建物は約90件、被爆樹木は約160本あり、民間建物の修繕に補助金を出すなど、保存に努めている。

新潟市北区の敬和学園高は毎年、3年生の希望者らが広島市を訪ね、被爆の跡を巡る実地学習を行っている。ことしも5日に広島女学院高の生徒の案内で、平和記念公園などを回った。

公園内に移植されたアオギリは、爆心地から約1・3キロで被爆し、すべての葉や枝が吹き飛ばされながらも、翌年に芽吹いて人々に勇気を与えたという物語を持つ。相場瑛里さん(17)は「生命力を感じる」と青々と葉が茂った木を見上げた。原爆ドームを初めて間近で見たという西川桃子さん(17)は「鳥肌が立った。悲しくなる」と眉をひそめた。

「本物」が若者の心に残す印象は強い。広島女学院高2年の黒田琴子さん(16)は「被爆を体験した人はいずれ亡くなってしまう。目に見える建物などを残していくことは必要だと思う」と説明した。

オバマ大統領は広島訪問時の演説で、「記憶を風化させてはならない」と述べた。被爆当時を物語る資料は、次世代まで記憶をつなぐ重要な役割を担う。

被爆樹木のアオギリを見学する敬和学園高の生徒＝広島市の平和記念公園